

旬のデジタルモードを楽しむ

JTAlert + WSJT-Xで

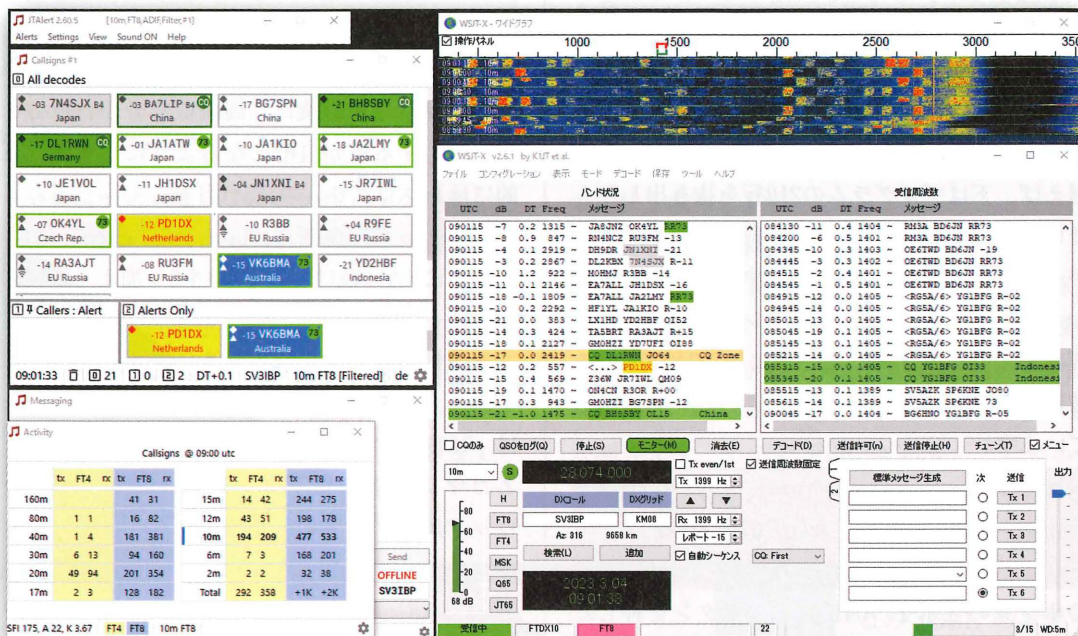


図1 JTAlertと組んだWSJT-X

JTAlertはWSJT-XやJTDXでデジタルモードをHFで運用するときのためにVK3AMA Laurie (ローリー)さんが開発したサポートソフトです。発表当時はJT65全盛期で、受信が終わった後の10秒間の間に交信相手(CQを出した局)と文面を選ぶ必要があり、どの局と交信するかを見極めるソフトウェアとして開発され、高頻度なバージョンアップで今に至ります。FT8/FT4では交信相手を選ぶ時間は極めて短くなり、運用局も増え、バンド状況欄に表示しきれないことも珍しくなくなりました。JTAlertは数々の便利な機能で交信相手を選ぶアクションをととてもラクにして私たちのFT8/FT4運用を快適なものにしてくれます。

以前、作者のローリーさんにQEX Japan誌に解説記事を寄稿し掲載されたと報告したところ、その件をJTAlertのサポートMLで紹介していただきました。そこに添えられたメッセージは「バージョンアップにより、テキスト機能は日本語にも対応しているから、ぜひ使いこなしFT8/FT4のQSOを楽しめるものにしてください」

でした。皆さんもぜひ活用されてはいかがでしょうか。

JTAlertの便利機能の数々

JTAlertはWSJT-X(またはJTDX)と一緒に動作させることで(図1, 図2), 次のような便利な機能が追加されます。

(1) Callsignsウィンドウによる受信局表示

ホワイトボードに貼り付けた「ふせん」のように受信できた局の情報が表示されます。ウィンドウの拡大縮小も自由自在なので、PCの文字は小さくで見づらい!という方にもお勧めです。ふせんの中に表示される情報の意味は図3のとおりです。パッチや色の違いで判別できます(図4)。情報の表示/非表示はCallsign Optionsで選べます(p.160, 図5)。

自分がコールされると、赤色でCallersに表示されます(p.160, 図6)。ふせんを(ダブル)クリックすると、



F18 快適運用

JR1AQN 前田 正明 Masaaki Maeda

(米国 Briarcliff Manor, NY在住)

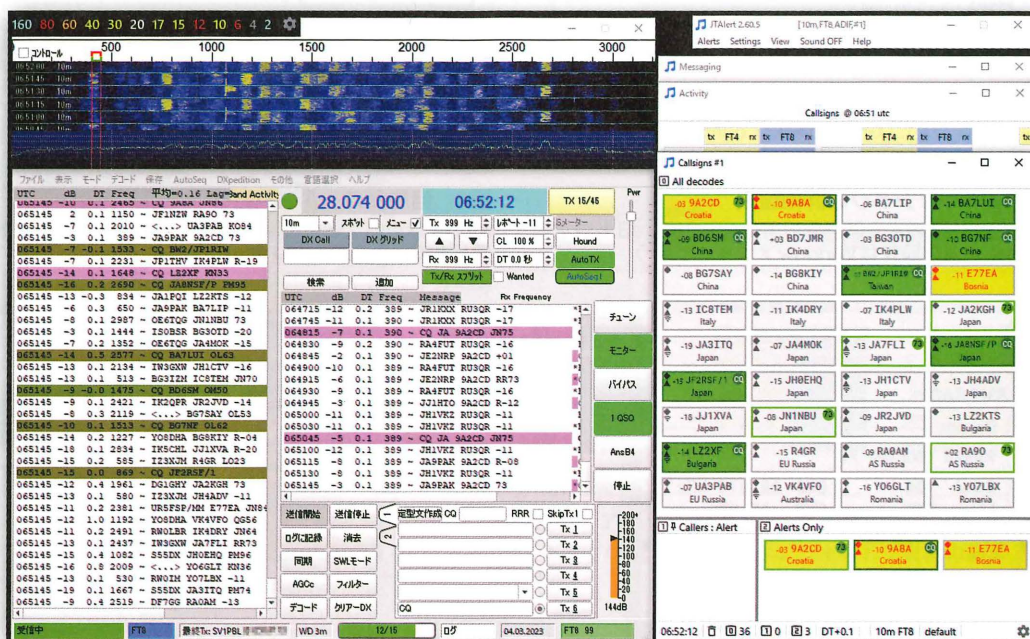


図2 JTAlertと組んだJTDX

次の通信手順に移れます。つまり、CQパッチが付いている局やCallersをクリックするとその局をコールできます。ふせんにマウスオーバーすると、その局の情報が細かく表示されます(p.160, 図7)。WSJT-Xは交信中の局も呼び出せます。JTDXの場合はCQパッチが付いた局、Callersを呼び出せます。

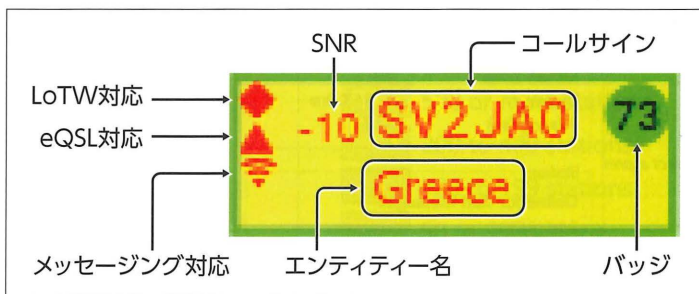


図3 「ふせん」に書かれた情報の意味

(2) アラート対象局は

Alerts Only欄に出現

アラート対象局のみ Alerts Only欄に表示されます(p.160, 図8)。設定によりアラーム音も出せます。アラート対象局は未交信エンティティ、米国州、CQ/ITUゾーンなどが設定でき、ふせんにも色が付きます(p.161, 図9)。CQアラートをONにして待ち受ければアクティビティが低いバンドでの交信や想定外のオープンも見逃しづらくなります。

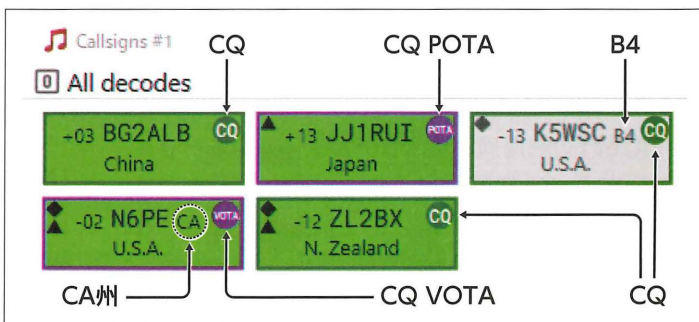


図4 ふせんの表示例



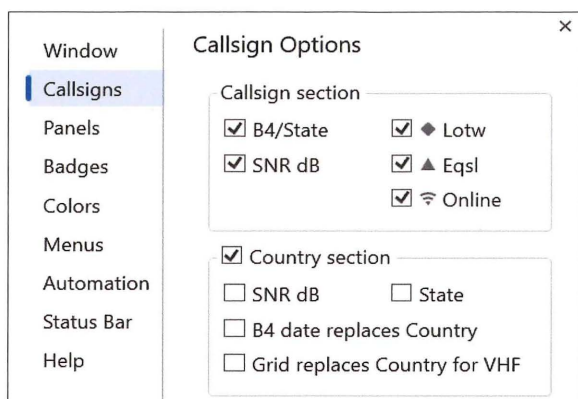


図5 Callsignsウィンドウの詳細設定

Callsigns設定を当図のようにするとふせんにSNR dBも表示される。拡大縮小値の設定はWindowメニューで行う

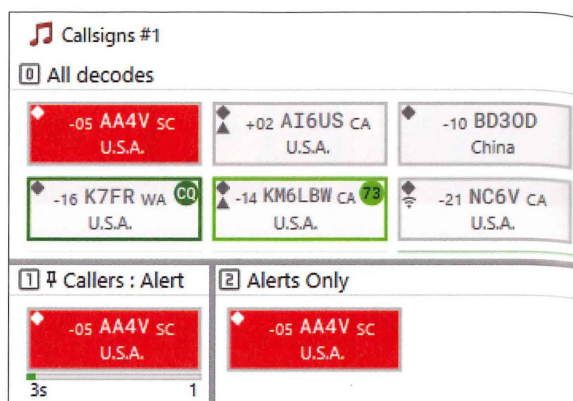


図6 自局がコールされた様子

All decodes, Callers: Alert, Alerts Onlyに赤色で表示され、呼ばれたことを猛烈にアピールしてくれる

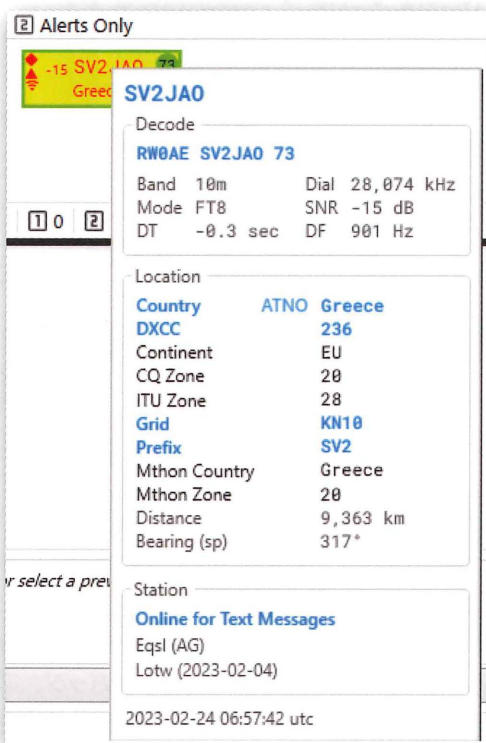


図7 ふせんにマウスオンで詳細表示

(3) メッセージングが可能

JTAlertの利用局同士でリアルタイムなチャット(メッセージング)ができます(図10)。このウィンドウはショートカットキー(F5)でスパッと前面に持ってこられます。1つ前の文章やあらかじめ作っておいた定型文をそのまま利用でき、3つ前の局までメッセージを打てます。利用方法として、QRMによるバンド変更リクエストなど

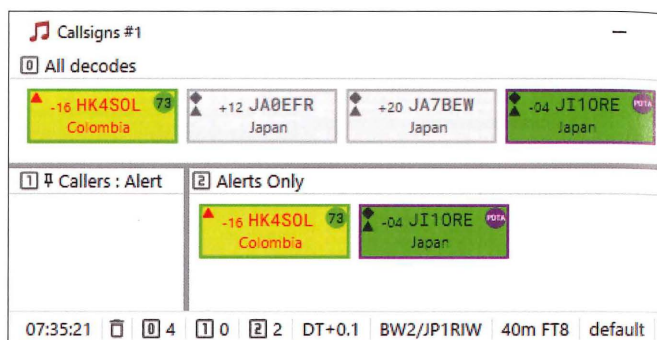


図8 アラート対象局はAlerts Onlyにも表示される

混雑しているときはAll decodesに表示しきれなくなる場合がある(ウィンドウを広げれば表示できる)。運用中はAlerts Only表示を活用すると便利

がありますが、筆者の場合、日本語でメッセージをいただくこともあり、うれしく思うことしばしばです。

(4) バンドアクティビティーが一目瞭然^{りょうぜん}

各周波数帯でどのモードがどれだけのアクティビティーがあるかが分かるアクティビティーウィンドウがあります(図11)。筆者は運用開始直後にどのバンドでどのモードがどれくらいにぎわっているかを運用開始前にこれで把握しています。地域別にフィルターもかけられ、画面のどこかに出しておくとも参考になります。

(5) アクティビティーサインのミニ版もある

バンドヒートウィンドウ(図12)では各バンドの利用状況が色で分かります。図13は色分けの初期値で、新局がオンエアーすると点滅します。160/80mバンドが点滅しだと夕方だな、と分かります。



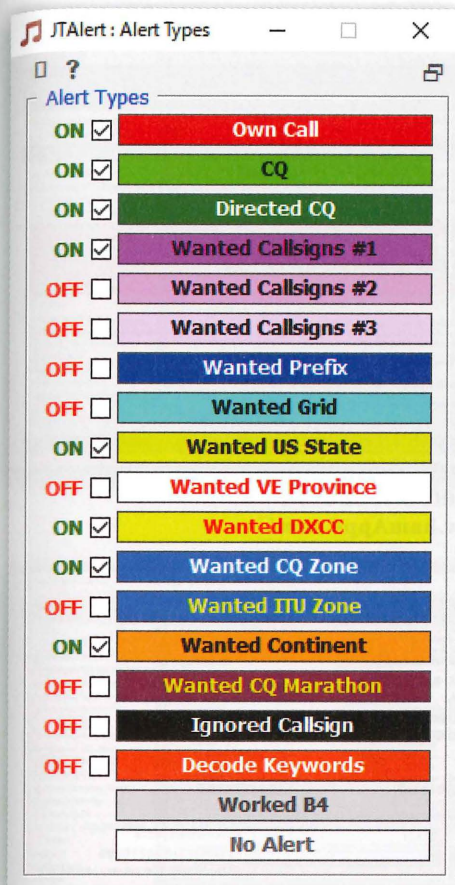


図9 各アラートの配色一覧

ツールバーからView→Types Summary Windowsを選び出現。左のチェックボックスでアラートの有効/無効を選ぶ

(6) デコード内容一覧から呼べる

デコズウィンドウ(図14)は、デコードされた局の詳細一覧表です。ふせんと同じ色分けで表示され、フィルターもかけられます。コールサインをクリックすればそのままコールできるので、詳細を見ながらコールする局を判断したい方にはうってつけの機能です。

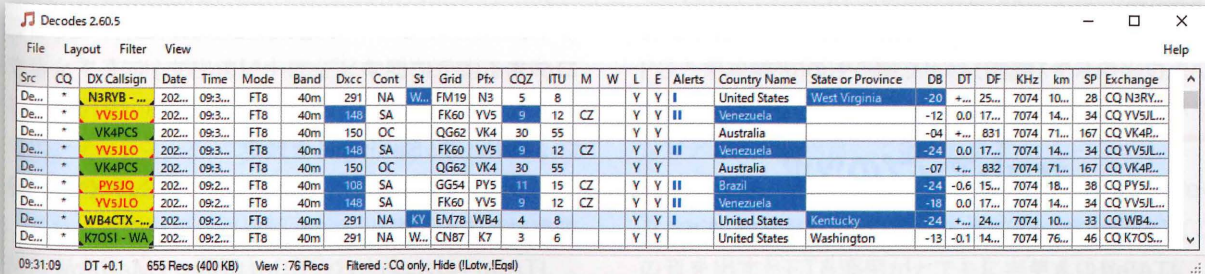


図14 Decodes (デコズ) ウィンドウ

図10 Messgaing ウィンドウ

リアルタイムなチャットが可能。右寄せで表示されているのは自分がタイプしたメッセージ
左側(青色)は相手からのメッセージ

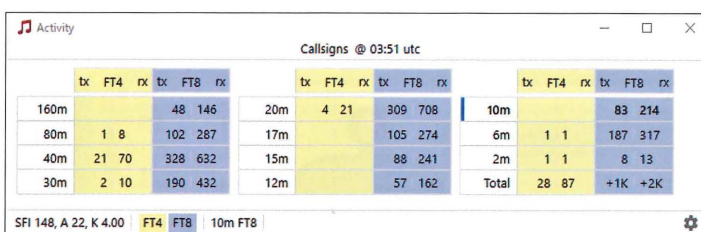
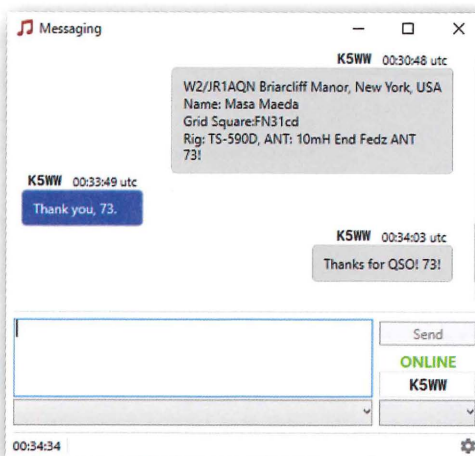


図11 Activity (アクティビティー) ウィンドウ

バンド/モードごとの運用局数を表示。ウィンドウ右下の歯車アイコンで詳細を設定可能



図12 Band Heat (バンドヒート) ウィンドウ

図13 Band Heatウィンドウ表示の配色一覧

- ☐ 500 or more stations
- ☐ 200 to 499 stations
- ☐ 100 to 199 stations
- ☐ 50 to 99 stations
- ☐ 1 to 49 stations
- ☐ No stations

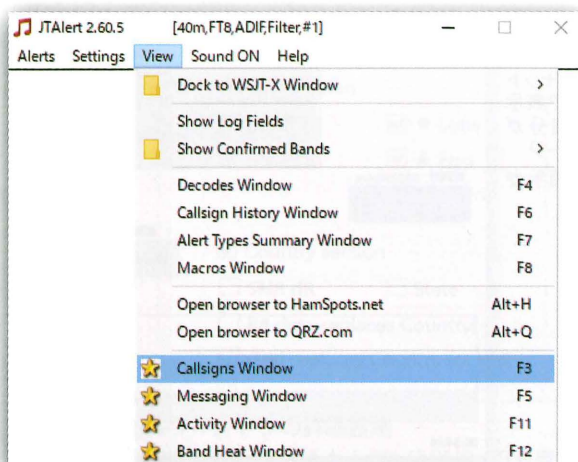


図15 ツールバーのView (ビュー) メニュー
各ウィンドウの表示設定はこちら。ショートカットキーも分かる

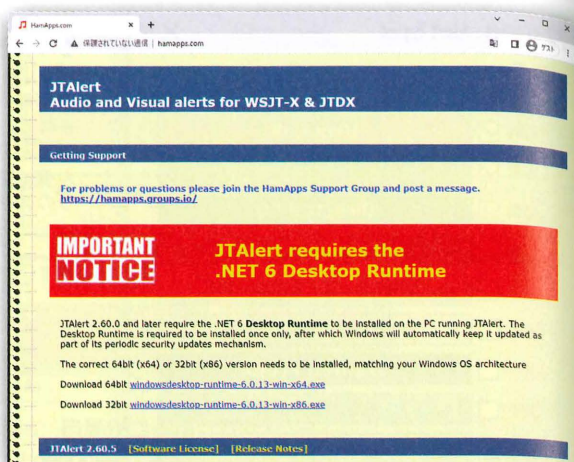
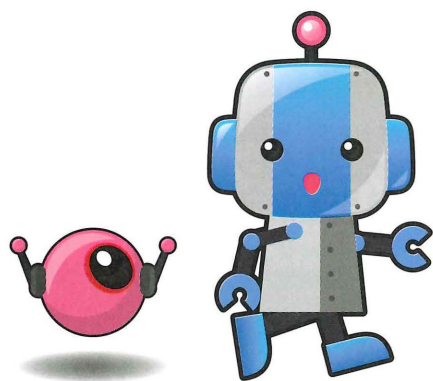


図16 JTAAlertのWebサイト
<https://www.hamApps.com/>



(7) 便利なソフトウェアランチャー機能

JTAAlertの起動時、設定により WSJT-X や Turbo HAMLOG も一緒に起動させて同時稼働できます (閉じる場合は各ソフトごと)。起動の順番違いや起動し忘れを防げます。

(8) ウィンドウ表示/非表示は自由自在

JTAAlertのツールバーにある View メニュー (図15) で主なウィンドウの表示/非表示が選べます。★印が付いたウィンドウ (機能) はよく使うものです。

セットアップのツボ

JTAAlertのセットアップ手順の概要を紹介します。

① JTAAlertの入手

<https://www.hamApps.com/> (図16) でダウンロー

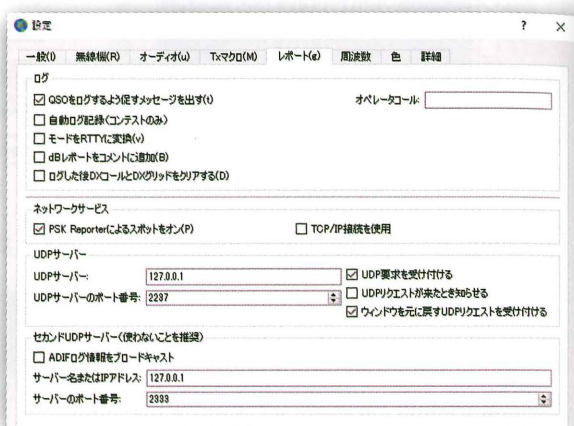


図17 WSJT-Xの設定箇所

ファイル→設定→レポート (タブ) で開く。
ログ、UDP サーバーの設定はこのようにする

ドします。Microsoft .NET 6 Desktop Runtime も必要ですが、同サイトのリンクからダウンロードできます。Callsign Database と Sound Files (お勧めは English US.) もダウンロードしてセットアップします。

② WSJT-X と JTDX の設定

図17のようにUDPサーバーに関する設定を行います (数カ所にチェックを追加、他は初期値)。「QSOをログするように促すメッセージを出す」にもチェックしておく と 便利 です。

③ JTAAlertの「Settings」を設定

JTAAlertはWSJT-XやJTDX (以下、WSJT-Xで説明) を起動してから動かします。

JTAAlertのメニューバーでSettings→Manage Settingsを選ぶと、設定の全項目 (図18) が出てきます。



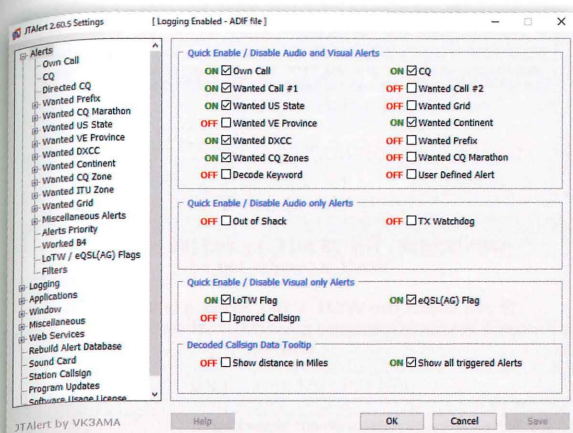


図18 Settings (セッティングス) メニュー

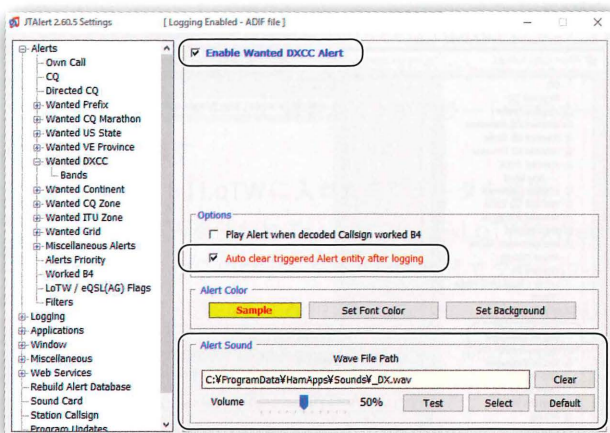


図19 DXCCアラートの有効設定例

Settings→Alerts→Wanted DXCC. 設定のポイントはEnable…とAlert SoundのファイルのSelect

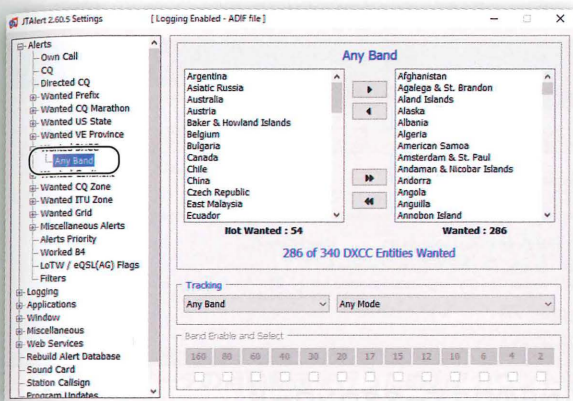


図20 DXCCアラートのアラート対象設定

Settings→Alerts→Wanted DXCC→Any Bands (または Bands)

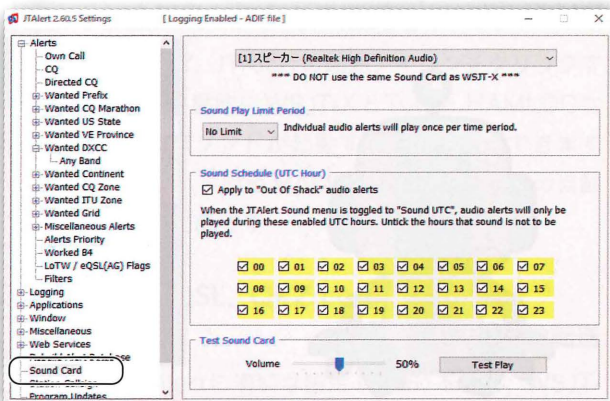


図21 アラートに使うサウンドデバイスの選択

Settings→Soundcard

項目の多さに圧倒されますが、まず設定したいのは、Station Callsignと、Alerts→Own Callです。

④ アラートの設定

アラートを出すか出さないかはSettings→Alertsの枝分かれの中にある各項目をお好みで設定していきます。CQを受信したら出るアラートは、Alerts→CQをEnableに。その他、未受信エンティティ局をアラート対象とするには、Wanted DXCCのところをEnableにして(図19)、さらに下の枝分かれのメニューで交信済みのエンティティをバンドごと (By Individual Band) または全バンド (Any Band) で登録します(図20)。

これは手作業または自動(後述)でセットでき、手作業の場合はここで根気よく登録します。

図19のAuto clear triggered Alert entity after

loggingにチェックすると、アラート対象局がログインされるとそのエンティティ(など)はアラートが出なくなります。必要に応じてチェックします。

⑤ 音も出したいときは

Settings→Sound Cardで図21のようにPCの「スピーカー」を選んで、PCにスピーカーをつなぎます(ノートPCの場合は一般的に内蔵スピーカーで可能)。PCと無線機をPC内蔵のサウンドデバイスの出力とつないでいる場合は別のスピーカーがつながる別のサウンドデバイスを用意して指定します。

各アラート設定ウィンドウのAlert Soundにwavファイルを指定するとアラート音が出ます(図19)。この音を出すでFT8運用がとてものにぎやかになり、楽しさが増します。ぜひお試しを。



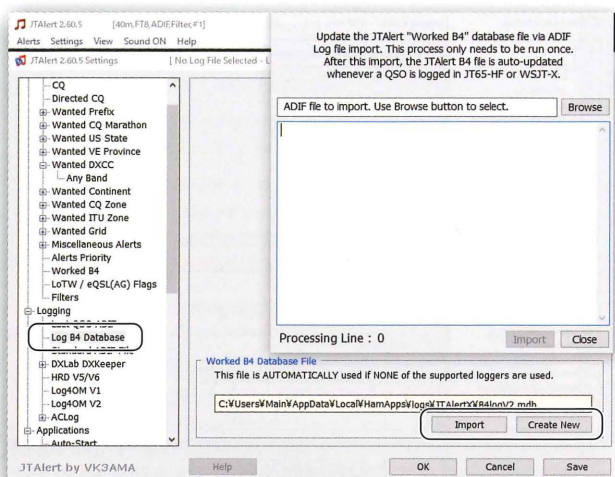


図22 B4判定データベースへのインポート
Settings→Logging→Log B4 Database

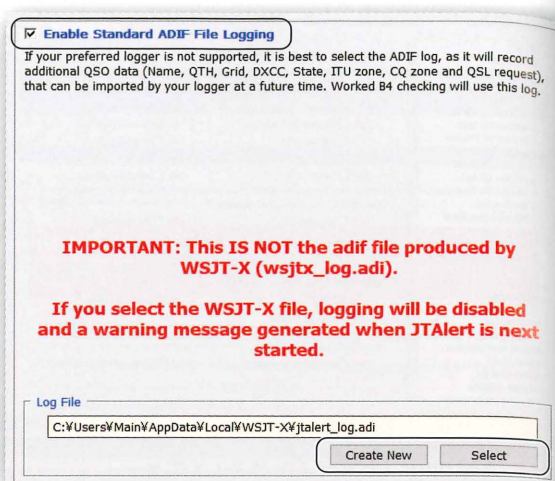


図23 Standard ADIF Fileの設定
Settings→Logging→Standard ADIF File

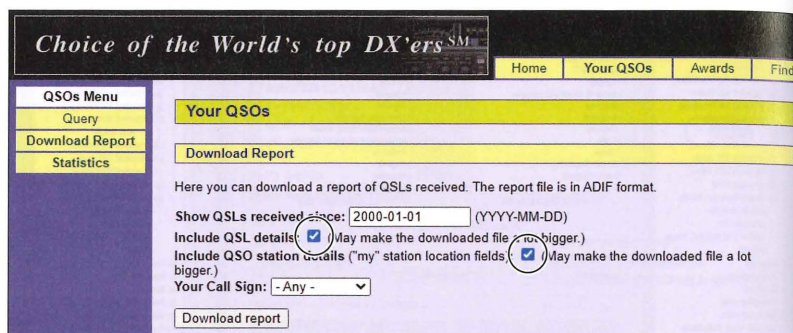
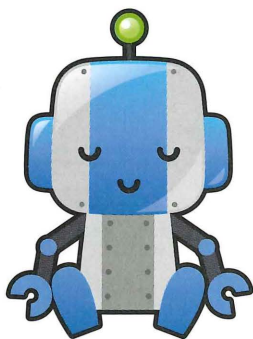


図24 LoTWシステムからのログデータダウンロード
Include QSL details, Include QSO station detailsの両方にチェックしてDownload reportボタンを押す

B4判定用の設定と Rebuild Alert Databaseの実行例

(1) B4 (Before) 判定のために

初めてJTAAlertをセットアップしたときは、SettingsのLogging→Log B4 DatabaseでCreate Newボタンを押します。その後、B4にしたいQSOデータが書かれたADIF形式のファイル（例えば、使い続けてきたWSJT-Xのwsjtx_log.adi）をJTAAlertのLog B4 DatabaseにImport（図22）することで、JTAAlertのB4判定に反映します。一度Create Newを行えば、交信することにデータベースに追加されていくので、手放しで大丈夫です。

なお、Standard ADIF File（後述）をEnableにしていると、このWorked B4 Database FileのImportや

Create Newができません（Enableを解除すれば可能）。

(2) アラート対象の自動設定

便利なRebuild Alert Databaseという機能があります。これは、設定されたStandard ADIF File（図23）を読んで、未交信のエンティティ/ゾーン/米国の州/グリッドなどのアラーム対象を自動的に設定し直してくれます。ただし、今までの設定内容が失われるので最初に手作業で設定された方は要注意です。

【手順】QSOデータが入ったADIFファイルを用意してwsjtx_log.adi以外のファイル名で任意のフォルダに入れ、Settings→Logging→Standard ADIF FileのSelectボタンでそのファイルを指定、Enable Standard ADIF File Loggingにチェックを入れます（図23）。

もし、すでにStandard ADIF Fileを利用している場





図25 JTAlertの起動と同時に立ち上げたいソフトウェアの設定
Settings→Applications→Auto Start

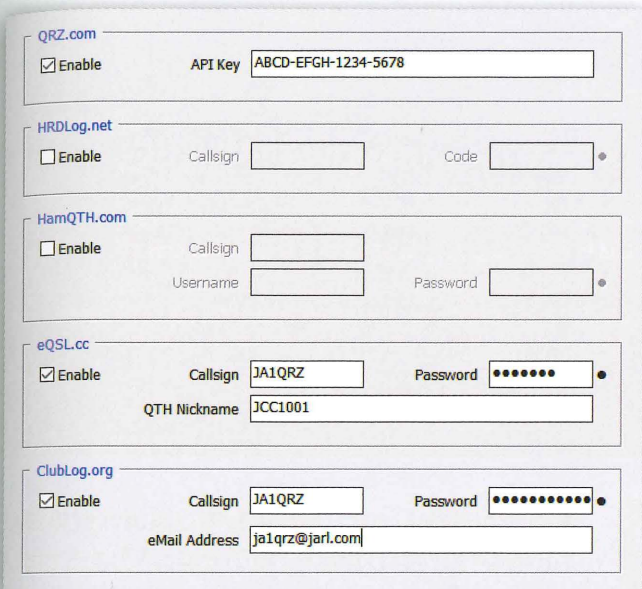


図26 QSOデータの自動転送を行うためのアカウント設定
Settings→Web Services→Online Logbooks

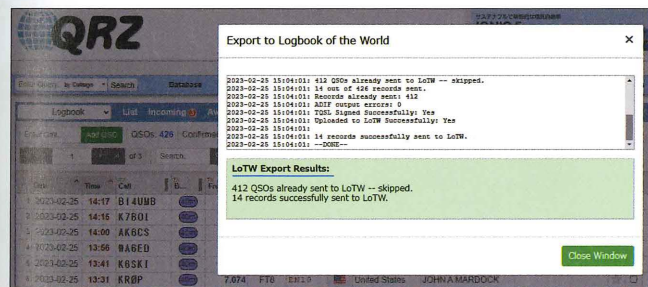


図27 QRZ.comのログデータをLoTWに転送した様子

合は、① Rebuildした後に今まで使っていたADIFファイルをSelectし直す ② 現用中のADIFファイル自体を編集（スキャンさせたいファイルをマージ）してスキャンさせる、のいずれかが考えられます。

次に、JTAlertを再起動し、Settings→Rebuild Alert Databaseで設定したいAlert（例：Wanted DXCC）を選んで読み込ませます。このとき、No QSL

Confirmation (Any Worked Station) にチェックして実行すると交信済みのエンティティ（コンファームに関係なく）がアラート対象から外れます。

【ヒント】LoTWに入れたログデータを活用

LoTWを使われている方でしたらLoTWのWebサイトからログデータをADIF形式でダウンロードして（図24）、Log B4 DatabaseにImportしたり、Rebuild Alert Databaseで読み込ませるStandard ADIF Fileとして利用できます。

JTAlertと外部ソフト/サービスとの連携

(1) 起動ソフトとの連携

例えば、JTAlertの起動アイコンをクリックすれば、自動的にWSJT-XとTurbo HAMLOGなどのログソフトが起動するように設定できます（図25）。Turbo HAMLOG側でJT-Get'sの自動起動が可能です。

(2) eQSL, QRZ.com, Club Logへの自動転送

JTAlertに適切な設定（図26）を施し、WSJT-Xの「QSOをログ」ボタンを押すだけで、交信するたびにログに記録すべきデータがこれらのサービスに送られます。LoTWへの自動転送機能はありませんが、QRZ.comでHam MemberになりSubscription (XML Logbook Data以上) を得れば、QRZ.comからLoTWへログデータを転送できます（図27、自動ではなく範囲指定で転送する）。

まとめに

今は特にHFハイバンドのコンディションが良く、JTAlertの便利さが実感できると思います。アラートが鳴りすぎる場合は、フィルター機能などを活用したり臨機応変にアラート対象を選択できるようにもなっています。とても便利なサポートソフトです。まだの方はぜひセットアップしてみたいかがでしょうか。

QQ

